

イタリアの橋

（助リバーフロント整備センター理事 長谷川憲治）

＜アルノ河のポンテ・ヴェッキオ＞

幸いに機会を得て、イタリアを旅行し、ルネッサンスの華とも言われた歴史のある橋を眺めることができた。橋の名は、ポンテ・ヴェッキオ（直訳で「古い橋」）。水の都ヴェネツィアに対して、花の都と呼ばれるフィレンツェの中心を流れるアルノ河を彩るアクセサリだ。

フィレンツェは、アルノ河が流れる盆地に、古代ローマ時代から人々が住みはじめた街だ。アルノ河の右岸すぐにあるシニョリア広場には、パラッツォ・ベッキオ（古い建物）と呼ばれる当時のフィレンツェ共和国政府、現在のフィレンツェ市庁がある。政治の中心のこの広場から宗教の中心サンタ・マリア・デル・フィオーレまでも二分とはかからない。左岸には、フィレンツェの支配者としてルネッサンス芸術の華をさせたメディチ家のピッティ宮、現在のピッティ美術館がある。

ポンテ・ヴェッキオは、このアルノ河の左岸と右岸をつなぐ一つの歴史的建造物で、現在も生き続けている。

る橋である。

第二次大戦では、シチリアに上陸した連合軍と後退をつづけるドイツ軍が、イタリア半島を南から北に戦線を移動していったのだが、フィレンツェでも一時、アルノ河の北と南に別れて両軍が戦火を交えている。そして、ポンテ・ヴェッキオ以外の橋はすべて爆破された。しかし、この橋を含めて、前述の歴史的、芸術的価値の高い建物などは、戦術的価値を優先することなく無傷で残されている。わが国の京都市に対するアメリカ軍の場合を思いださせるところだ。

ポンテ・ヴェッキオは、その名のとおりフィレンツェでは最も早く作られた橋だが、古代ローマ時代から中世の間ずっと、橋けただけが石造で、その上に渡した部分は木造だった。1177年にオール石造になった。ただし舗装は当時のやり方どおり赤レンガを敷いたものであった。1333年の洪水では完全に流されたが、1345年になって、現在

の三つのアーチ型の橋げたの、頑丈で、橋幅も広く、舗装も石を敷きつけた橋が完成した。



ポンテ・ヴェッキオ遠望。3〜4階の家屋が造られている。

この時に、橋の両側に店が並び、中央部だけ空間を残して人々は河を眺望することが出来る形になった。橋の上には200年の間、肉屋が店を開いていた。豚肉だけは専門の店だが、羊、鶏、鳩、兎などは一つの店であった。牛はあまり食べなかつたらしい。店が立ち並んでしかも、肉屋だから橋の上は朝夕は喧噪を極めて、そのうえに当時は肉をさばい

て出る汚物は店の下の河に投げ込んでいたという。

その後、肉屋は移転させられ、そのあとに貴金属を扱う店が移って来た。そして今日の、右岸、左岸の多くの歴史的建造物をつなぐ観光の目玉の一つとして、フィレンツェの町にふさわしいものになったのである。



しかし、後で述べるヴェネツィアと違って、フィレンツェは土地が無いところではない。背後に広い土地があるのに、なぜ橋の上にまで店をつくったのか。

太田静六氏は「眼鏡橋 日本と西洋の古橋」で、次のように述べている。

「フィレンツェは輝かしいルネッサンス発祥の地として知られ、レオナルド・ダ・ビンチやミケランジェロなどの芸術家をだし、建築家ではブルネレスキやアルベルティらの天才を輩出した。

市の中心近くを東から西へ貫流するのがアルノ川で、その中央付近にかかるのがベッキオ橋である。この橋が有名なのは14世紀にかけられた古橋というのではなく、3連式石造アーチ橋上に写真で見られるような3階建の商店街が立ち並ぶからである。

当初の橋上家屋は金銀細工などの店が中心であったが、次第に増えて今日に至り、現在では橋上だけでは足りず、橋から出張って増築される

までになった。それにしても、三階建の家屋群を橋上一杯に乗せながら、ビクともしない石造アーチ橋の強さには今更ながらに驚く。

いくら橋上に家を建てたくとも、橋幅が狭くては建てられないが、この橋の幅員は大変広いので、これ幸いと人通りの多い橋上に商人たちが目をつけたのであろう。

商魂の逞しいのは日本商人の独壇場でもなさそうだが、このようになると返って観光資源になり、本稿のように遠く離れた日本でもわざわざ紹介されるのだからしめたものである。」



貴金属商店。カメラもまぶし過ぎるため露出オーバー。

ともあれ太田教授は、ポテン・ヴェッキオの商店のたたずまいを商魂の逞しさに片付けている。

しかし、川田工業(株)社長・川田忠樹氏は、名著「歴史の中の橋とロマン」で次のように述べている。

「イタリアはフーレンスの風物と

して、あまりにも有名なベッキオ橋の上の階は、兩岸の宮殿の間を連絡する回廊でしたが、下の階のほうはこの橋の建設費を負担し、維持費を捻出している宝石商たちが、通路の両側にずらりと軒を並べました。

しかし、このベッキオ橋で最も重要なことは、大胆な部分円アーチが採用されたことです。同じ円弧を使用しながらも、はるかに大きな支間を、太鼓橋のように路面を高くすることなしにとばすことができ、したがってまた支間に対して橋脚の占める割合を相対的に小さなものとすることができるからです。

たとえばこのベッキオ橋の場合、支間は中央で30メートル、その他が27メートルに対し、橋脚の厚さは6メートルですから、その比は5分の1強ということになります。これはオールロンドン橋がほぼ2分の1に近かったことを考えれば、大変な技術的進歩であったことがわかり戴けると思います。」

橋のうえの家という点、私達日本人にはちょっと不思議な気もするが、中世のヨーロッパでは、それほど特殊なことではない。1209年に完成したオールロンドン橋の通行料は歩行者が4分の1ペニー、荷駄2分の1ペニー、騎乗者1ペニー(1285年)であった。14〜15世紀になると、橋のうえはロンドン一の商業地区となり、さらに、16世紀になると橋のうえは商店だけでなく、住宅街としても一流の場所となったと

いう。これは中世都市の生活環境の悪さに比べて、橋のうえは、いわば下水道完備という便利さがあつたためといわれている。



それはともあれ、話をポンテ・ヴェッキオとアルノ河に戻そう。ローマ人が建設した当時のフィレンツェは、アルノ河の右岸にくっついていて、それが河をはさんで左岸にまで広がったのは中世半ばである。そして、アルノ河を抱え込むことによってフィレンツェは住み心地のよい都市に変わった。



堰の両端にのこる旧市壁。

街中を河が流れているということは、そこに住まう人々に、言葉では表現しようも無いほどの安らぎを与えるからである。

アルノ河上流部の、フィレンツェの市壁の切れ目に、堰が、河の流れに対して斜めに作られて、市壁を繋ぐようになっている。下流部にも斜めの堰があるが、これは市壁の切れ目の少し内側になる。

こうして上流と下流の二か所で堰止められたアルノ河は、街を二分するところか、フィレンツェの都市空間を見事にまとめあげて、街中をゆつくりと穏やかに流れている。

しかし、なぜここに堰が必要なのか。水の流れをゆったりさせるためなのか、また、なぜ斜めの堰を作ったのか。上流部のものは市壁をつなぐ必要があつたのかもしれない。いや、堰をつないで市壁の方が後から作られたのかもしれない。しかし、下流部の堰はどうか。出発前に市街地の地図を眺めて、これはどうしても現地で地形を見たいものだと思っていたが、こうして堰の脇に立ってみると一目瞭然。単に流れを取り入れ口につなぐだけのものだ。日本なら、堰は普通は川の流れに対して直角に作るところが、ここでは砂礫堆に沿って斜めになっていることが違うだけだ。



しばらく眺めていたが、日本と同じく、なかなか魚は釣れてこなかった。

竿を出している人がいたので、しばらく眺めていたが、日本と同じく、なかなか魚は釣れてこなかった。

アルノ河は全長240キロで、ハドソン川の2分の1程度、セーヌ川の3分の1程度で、アルプス近くの斜面にその源を発し、フィレンツェとピサを通過してリグリアナ海に注

いでいる。

浅くてゆったりしたその流れは、嵐による洪水の場合にしか大きな流れにならず、したがって、アルノ河はフィレンツェの舟運のためにはそれほど重要な役割を果たしてこなかった。



1502年、レオナルド・ダ・ヴィンチは、このアルノ河を運河化する提案を行った。

当時フィレンツェとピサは、都市国家同士、激しい戦争状態にあった。これに決定的な結末をつけようとしたのが梟雄チエーザレ・ボルジアである。彼は自らの手でイタリアの統一を目論んでいたが、レオナルドは、チエーザレ側について、自らの土木技術を実地に試みようとしたのが、この提案である。

ロイ・マンは「都市の中の川」で、このアルノ川改造計画について、次のように述べている。

「1502年、レオナルドはフィレンツェがピサ（アルノ河の下流の屈曲部にある）にたいして行った戦略作戦を助言するために、チエーザレ・ボルジアのもとで働いた。彼はフィレンツェの下流で河を運河に改造し、更にこれを、ピサの北方にある山間を通して海に注ぐという提案を行った。これによって、ピサは、地中海との経済的な絆となつていてる河を失うことになり、一方、フィレンツェは、浅くて曲がりくねつたアルノ河からは得られなかつた航行可能な運

河を得ることが出来るはずであった。この計画には水門はない。」

しかし、この提案は、その後の政治情勢の変化によって、ついに日の目を見るにいたらなかった。それでも、アルノ河改造に必要な掘削機械、土砂運搬機械の図面と作動計算は、その後の大規模な土木工事、河川開発の技術の発展にとって重要な貢献をしたという。

◆
アルノ河は昭和41年11月、なんと700年間の記録のなかで初めての大洪水に見舞われた。アルノ河下流の標準的な流量は106トン、低水量は1・7トン。これに対して洪水時の流量は2600トン（いずれも毎秒）を記録している。

水位は、右岸のサンタ・クロッチェ教会の側廊で15フィートに達した。ここには、マキアヴェッリ、ダンテ、ミケランジェロ、ロッシーニなどの見事な墓がある。勿論、多数の優れた美術品、蔵書が、水と泥によっていためられ、失われた。

この時の水位は教会に今も残っている。私が床に立って手を伸ばしても、さらに50センチも上で、見事な彫刻のある墓はその下になっている。

◆
今、ポンテ・ヴェッキオの橋のたもとに立って、あらためて橋の中央の商店街を眺めると、7月の強い日差しのもと、高価な貴金属のきらめきとは不い合いなヒッピー族がギタ

ーを掻き鳴らす、コーラの缶は投げてある、それを縫って観光客が、あるいは土地の人が肩を触れ合うほどこに行き来している。橋のたもとの両側には太い円柱が立てられて車は通れない。つまり猥雑歩行者天国である。

2階、3階部分はどうやら住居、倉庫で、よく見ると鮮やかな花の鉢が並べられ洗濯物がみえる。生活の匂いがある。

しかし、この橋が建てられたころは、この3階の上流側は当時の最高権力者メディチ家の住居である左岸のピッティ宮から右岸のバラツォ・ベッキオ、すなわちフィレンツェ共和国政庁へと通ずる特別の通路になっていたのだ。フィレンツェを裏から支配した事実上の最高権力者であり、そして最大の富豪、そしてルネッサンスの華を開いたメディチ家の貴族達が人目に触れることなく通った抜け道がここなのだ。



橋にしがみついて作られているオソマツな建物。

また、ポンテ・ヴェッキオを、これを外の、河のほうから眺めると、商店街よりも更に汚らしい。どうやって作ったものか解らないが、橋の幅員を越えて河にせりだし、本来の構築物にしがみついた家屋の粗末な建てようは、なんとも戴けない。汚水さえ垂れている。これが、なんとルネッサンスの華かと顔をそむけたくなる。橋は川のアクセサリーで飾りたいと願う私にとって、ポンテ・ヴェッキオの現状は、その歴史が華やかなだけに尚更にただ悲しい。

彼女を最高のアクセサリーで飾りたいと願う私にとって、ポンテ・ヴェッキオの現状は、その歴史が華やかなだけに尚更にただ悲しい。



ポンテ・ヴェッキオの賑わい。通りの方から見た2〜3階部分。



今は使われていない取水口。